

発刊に寄せて

福島県の石橋群保存会 会長

丹野 義明



福島県の石橋群 土木遺産認定記念シンポジウム報告書の発刊にあたり、ごあいさつを申し上げます。

当会は、福島県内に現存する石橋の土木遺産認定や次代への継承を目指し、福島市内の地域づくり団体が中心となって令和4年1月に設立されました。そして同年9月には、当会から土木学会への推薦が認められ、9橋の石橋が土木学会選奨土木遺産に認定されました。

その後、この認定を記念し、令和5年11月19日には、当協会の主催による「石橋群が紡ぐ歴史・ひと・地域」をテーマとしたシンポジウムを盛会裏に開催することができました。これもひとえに、認定に対し様々なご助言を頂いた日本大学の知野泰明先生、東北土木遺産研究所長の後藤光亀先生を始めとする顧問の皆様や、関係行政機関の皆様の様々なご支援の賜物であると感じております。改めまして、深く感謝申し上げます。

さて、当会では、このシンポジウムの成果をとりまとめた報告書を発刊することといたしました。この報告書には、福島県の石橋群全9橋の概要や、知野先生による基調講演、多彩な出演者によるパネルディスカッションの議論の内容、さらには福島市の荒川に存在した、日本最大級の石橋である信夫橋石橋についての特別寄稿などを掲載しており、図書館や関係機関への提供を通じ、郷土の歴史研究や地域づくりなどに幅広く活用されることを期待しております。

思い返せば、令和3年の秋に、後藤先生と当時福島県東北建設事務所所長でありました相澤さん、ふくしま100の会の松田裕子さんが、松川町文化財保存会の加藤一郎さんの案内で、松川橋に足を運んでいただきました。

後藤先生たちが橋の欄干の石の継ぎ手や親柱に刻まれた文言等を熱心に見て回り、記録している姿を拝見して、今までなんとなく価値あるものとして活動していたものが、ストーンと腑に落ちた感じがいたしました。

今まで遺産認定制度や石橋の魅力について、いろいろな方から助言やご意見をいただき、松川橋の環境整備や啓蒙活動を行ってきましたが、この日を境に水原川の清流のように一気に土木遺産の認定まで進んだことが昨日のように思い出されます。

この報告書は、「福島県の石橋群」に対する当会の会員の皆様の思いやこれまでのご努力が結実した成果であり、これからの当会の活動の道標となるものです。この報告書が今後様々な方の目に触れ、石橋の存在を知っていただくうえで大いに活用されることを願ってやみません。

当会は、関係団体の皆様との連携の下、石橋群の歴史的価値を一層高め、後世に残していく活動に一層尽力してまいりたいと考えております。今後とも、皆様方の一層のご支援、ご協力を切にお願い申し上げます、発刊にあたってのあいさつとさせていただきます。

発刊に寄せて

日本大学工学部土木工学科土木史・
景観工学研究室 准教授

知野 泰明



土木学会選奨土木遺産に認定された福島県の石橋群。それを祝しつつ、石橋の歴史をも通観させる遺産ともなればと願う。石橋は石を主材として人や物流を上部にて通過させる構造が切石にて構成されている。石の積み方は世界を見渡すと種々あるが、我が国の公共で使用されてきた石橋はアーチ構造が主流である。その構造を簡単に記すと、下部から上部に向かって半円を描くように石が積み上げられ、上部中央に要石が置かれる。アーチは橋の延長方向に一つ、または複数が連続する。

石橋構造の一つを簡単に紹介したが、そこには人類の長い歴史をみることができる。アーチ構造の始まりは一日にして成らなかった約2,000年前の古代ローマ時代に遡り、石や煉瓦を主材として建造物を支えるアーチ構造形式が生み出された。今日においてもそれらの遺構の多くが残っているが、フランスのポン・デュ・ガール水路橋では、社会基盤をも支える規模にまで到達したことを目の当たりにすることが出来る。さらには、石を割って加工し積み上げることに注目すれば、その歴史は200万年以前からの打製石器制作の始まりにまで遡るといえよう。石橋を構成する石の一つひとつは構造全体からみれば小さいが、これらが力学的安定の下で積み重ねられることにより大規模な橋を為したことは人類の知恵の奇跡の一つといっても過言ではなからう。

土木学会選奨土木遺産に認定された福島県や山形県の石橋群。それは、認定の目的を伝えることをはるかに超えて、我が国における石橋の歴史を知ることのみならず、未来の人々に人類の英知の歴史をも伝え行く遺産でもある。それが東北の地に残っている。福島石橋群保存会による石橋を知る活動と今回のシンポジウムは、その伝道の始まりなのかと思う。

発刊に寄せて

東北土木遺産研究所長

後藤 光 亀



土木学会「選奨土木遺産」の認定基準は、優れた技術やデザイン、技術の系譜、そして地域に貢献し、地域の人たちに愛されている、などが評価されます。

「日本の近代土木遺産」土木学会編には、東北地方の石橋として、宮城県に1橋、山形県に6橋、福島県に2橋のみの掲載です。平成21年度に認定された「山形の石橋群」の公募申請時には14橋を確認し、内11橋を申請し認定されました。令和4年度認定の「福島の石橋群」は公募申請時に12橋を確認し、内10橋を申請し、9橋が認定されました。

「福島の石橋群」は、公募申請にあたり多くの方々による文献・現地調査により地域に埋もれた石橋群という宝物を掘り起こしてくれました。石橋という美しさ、石橋技術の伝承、石橋を愛でる気持ち、公募申請に向けて活動された地元の方々の熱意が「選奨土木遺産」の認定につながりました。まことにおめでとうございます。そして、関係者の皆さまの活動に対し深く敬意を表します。

仙台在住の筆者は、福島県下の土木遺産群に関し、福島駅前の土木遺産サロン（松田裕子氏直営）にたびたびお世話になっています。このサロンには、国・県・市の行政、民間そして市民団体の多くの方々が参集され、これまで選奨土木遺産に認定された荒川流域治水・砂防事業、万世大路、西根堰などの貴重な情報交換の場でした。その中で、福島県の石橋群では、当時、福島県北建設事務所長の相澤広志氏などが、石橋の管理者等への手配、公募申請を行った福島の石橋群保存会の設立（丹野義明会長）等、町内会・市民団体・行政等との連携にご尽力いただきました。

また、土木遺産つながりで、「福島の石橋群」と「山形の石橋群」の相互見学と交流も始まりました。山形の石橋群は、東北地方がほとんど海の中であった約1500万年前の火山活動による凝灰岩、福島の石橋群は海に沈まなかった阿武隈山地の約1億年以上前の花こう岩、石材の違いも興味津々です。

選奨土木遺産の認定理由は、「明治期の山形の石橋群は、九州の石橋建造技術を地元の石工等が習得し広めていった貴重な土木遺産」、「福島の石橋群は、近世から明治期に伝承された信州や九州の石工技術を地元の石工が磨き育てた歴史を顕彰できる貴重な土木遺産群」、近世の信州高遠の石工技術、近代の猪苗代（安積）疏水の大部分の石橋技術、土木県令三島通庸が導入した薩摩の石橋技術、そして地元で醸し出された近代の石橋技術の伝承を堪能したいものです。認定後も、南会津に若水石橋の発見、信夫橋の遺構や文献発見など、「選奨土木遺産」の追加認定にも多くの期待が寄せられています。

これら土木遺産群が、これからの地域づくりへの利活用や全国との地域間交流へと発展することを祈念しております。